

古文ドリル：「の」の識別 100問

対象：高校生・大学受験生（共通テスト～難関私大・国公立二次まで） 著作権：個別指導塾フィット / 中本裕太

はじめに：「の」の正体（4用法）

古文の格助詞「の」は、受験生がもっとも識別に迷う助詞のひとつです。おもな用法は **4種類** あり、それぞれ意味がまったく異なります（このほか「～のように」と訳す比喻〔連用修飾格〕の用法もあります。例：あしひきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜を）。

用法	言い換え	見分けポイント	例
① 連体修飾格	(AのB)	直後が 体言 、修飾関係	春 の 花
② 主格	が	下の 用言（述語）の主語 になる（連体形で下の体言に続く形や「～ば」「～て」の句の中に多い）	風 の 吹く夜
③ 同格	で （～であって）	前後が 同じもの を指す・後ろの句が 連体形 で終わり、その下に「の」の前と同じ体言を補える	白き鳥 の 、嘴と脚と赤き
④ 準体格	～のもの・～のこと	「の」の下に 体言を補える （〈体言＋の〉の形で、すぐ後には・も・を・に・なり などが続く）	唐 の はさらなり（＝唐の〔なでしこ〕は）

識別の鉄則（置き換えテスト）

- 「**が**」に置き換えて自然 → **主格**（「の」の前の語が、下の用言〔述語〕の主語になる）
- 「**で**」に置き換えて自然＋前後が同一物 → **同格**（後ろの句が連体形で終わり、その下に前と同じ体言が省略されている）
- 「**の**」の下に**体言を補える**（「～のもの」「～のこと」と訳せる） → **準体格**（〈体言＋の〉の形。すぐ後には・も・を・に・なり などが続く）
- どれにも当てはまらない（直後が体言の修飾） → **連体修飾格**

主格・同格・準体格の3つを先に確認し、残ったものを連体修飾格と判断するのが確実です。

🎯 解き方のコツ（試験本番で3秒）

コツ① 「の」の直後の語を見る

- 直後が**体言（名詞）** → まず **連体修飾格**（春の花／都の月）

- 直後が**用言**（動詞・形容詞など）→ **主格** か **同格** を疑う
- 直後が**助詞**か**断定的「なり」**（は・も・を・に・なり など）→ **準体格**（下に体言を補う。の＝～のもの・～のこと。「～のごとし」「～のやうなり」の「の」は除く）

コッ② 後ろが連体形の時、「が」で訳して主語になるか

- 「風の吹く」＝「風**が**吹く」と自然 → **主格**
- 「白き鳥の…赤き」＝前の「鳥」と後ろが**同じ鳥** → **同格**（「で」で訳す）
- 見分け：連体形の下に「**の**」の**前と同じ体言**を補えるなら同格。連体形が**別の体言を修飾**している・下に「こと」を補う・文がそこで終わる（連体止め）なら、ふつうは主格（ものを並べ挙げる文では同格と読むこともある）。

コッ③ 「の」の前後が同じものか別のものか

- 同じもの（白き鳥＝嘴脚赤き鳥）→ **同格**
- 別のもの（風／夜）→ **主格** か **連体修飾格**

よくある引っかけ

- 「の」の直後が動詞でも、**後ろの体言を別に修飾**していれば主格（風の吹く**夜**）。
- 「の」の前後が同一物なら、直後が連体形でも**同格**（清げなる僧の、黄なる地の袈裟着たる〔僧〕が来て）。直後が体言でも、後ろが連体形で終わり前と同じ体言を補えるなら**同格**（白き鳥の嘴と脚と赤き〔鳥〕）。
- 「唐**の**は」のように「の」の下に体言を補えるなら**準体格**（連体修飾格と混同しない）。「白きのを着る」のような〈連体形＋の〉は今の言い方で、古文では「白きを着る」と連体形がそのまま体言の働きをする（準体法）。

採点表

各セッションごとに自己採点し、最後に合計を記録してください。

- 基礎（Q1～Q20）： ／20
- 標準（Q21～Q50）： ／30
- 応用（Q51～Q80）： ／30
- 入試レベル（Q81～Q100）： ／20
- 合計： ／100

【第1部】基礎編（Q1～Q20）

4用法を純粹に識別する基本問題。各用法5問ずつ。

Q1. 次の傍線部「の」を識別せよ。

春の花。

Q2. 次の傍線部「の」を識別せよ。

山の端。

Q3. 次の傍線部「の」を識別せよ。

君の声。

Q4. 次の傍線部「の」を識別せよ。

都の月。

Q5. 次の傍線部「の」を識別せよ。

人の心。

Q6. 次の傍線部「の」を識別せよ。

風の吹く夜。

Q7. 次の傍線部「の」を識別せよ。

月の出づるころ。

Q8. 次の傍線部「の」を識別せよ。

雪の降る朝。

Q9. 次の傍線部「の」を識別せよ。

鳥の鳴く声。

Q10. 次の傍線部「の」を識別せよ。

花の散る春。

Q11. 次の傍線部「の」を識別せよ。

赤き花の、いと大きなるを折りつ。

Q12. 次の傍線部「の」を識別せよ。

をかしげなる児の、二つばかりなるを抱きて来たり。

Q13. 次の傍線部「の」を識別せよ。

いと清げなる僧の、黄なる地の袈裟着たるが来て。(更級日記)

Q14. 次の傍線部「の」を識別せよ。

大きやかなる男の、太刀帯きたるが、門に立てり。

Q15. 次の傍線部「の」を識別せよ。

ほそやかなる女の、髪長きが、出で来たり。

Q16. 次の傍線部「の」を識別せよ。

この扇は、かの人なり。

Q17. 次の傍線部「の」を識別せよ。

わが宿の梅は、隣のよりも早く咲きにけり。

Q18. 次の傍線部「の」を識別せよ。

空の月も、池のも、ともに澄めり。

Q19. 次の傍線部「の」を識別せよ。

草の花はなでしこ。唐のはさらなり、大和のもいとめでたし。(枕草子)

Q20. 次の傍線部「の」を識別せよ。

わが筆は折れにければ、人のを借りて書く。

【第2部】 標準編（Q21～Q50）

実際の古文に近い例文で、4用法を見分ける。置き換えテストを順に試そう。

Q21. 次の傍線部「の」を識別せよ。

秋の夕暮れ。

Q22. 次の傍線部「の」を識別せよ。

水の流るる音。

Q23. 次の傍線部「の」を識別せよ。

雨の降るを見る。

Q24. 次の傍線部「の」を識別せよ。

大きな柑子の木の、枝もたわわになりたるが、まほりをきびしく囲ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばと覚えしか。(徒然草)

Q25. 次の傍線部「の」を識別せよ。

この笛の音は、父のに似たり。

Q26. 次の傍線部「の」を識別せよ。

旅人の行く道。

Q27. 次の傍線部「の」を識別せよ。

庭の桜。

Q28. 次の傍線部「の」を識別せよ。

星の光る空。

Q29. 次の傍線部「の」を識別せよ。

やむごとなき人の、おはしければ、人々かしこまりぬ。

Q30. 次の傍線部「の」を識別せよ。

にほひやかなる花の、露をおびたるを、文に付けてやる。

Q31. 次の傍線部「の」を識別せよ。

月の都。(竹取物語)

Q32. 次の傍線部「の」を識別せよ。

これは春の歌、かれは秋のなり。

Q33. 次の傍線部「の」を識別せよ。

川の音聞こゆ。

Q34. 次の傍線部「の」を識別せよ。

我が身一つの秋にはあらねど。(古今集)

Q35. 次の傍線部「の」を識別せよ。

あまたの文の中より、姫君のを取り出づ。

Q36. 次の傍線部「の」を識別せよ。

鶯の鳴く。

Q37. 次の傍線部「の」を識別せよ。

高き屋の上。

Q38. 次の傍線部「の」を識別せよ。

いと白き犬の、いみじう大きなが、走り来たり。

Q39. 次の傍線部「の」を識別せよ。

海の色。

Q40. 次の傍線部「の」を識別せよ。

雲のゐる山。

Q41. 次の傍線部「の」を識別せよ。

紅の衣。

Q42. 次の傍線部「の」を識別せよ。

心ざし深かりける人の、夜離れせず通ふありけり。

Q43. 次の傍線部「の」を識別せよ。

人々の車はみな帰りぬるに、大将ののみ残れり。

Q44. 次の傍線部「の」を識別せよ。

谷の水。

Q45. 次の傍線部「の」を識別せよ。

子の泣くを見て。

Q46. 次の傍線部「の」を識別せよ。

いみじう白き扇の、いと多く散りたるを、取り集む。

Q47. 次の傍線部「の」を識別せよ。

旅の空。

Q48. 次の傍線部「の」を識別せよ。

浪の寄する磯。

Q49. 次の傍線部「の」を識別せよ。

この二つの琴は、大納言のと中納言のとなり。

Q50. 次の傍線部「の」を識別せよ。

花の香。

【第3部】 応用編 (Q51～Q80)

紛らわしいもの、同一文中に複数の「の」が出るもの、有名作品の一節で実戦的に。

Q51. 次の傍線部「の」を識別せよ。

春の夜の夢ばかりなる手枕に。(千載集)

Q52. 次の傍線部「の」を識別せよ。

世の中にたえて桜のなかりせば。(古今集・在原業平)

Q53. 次の傍線部「の」を識別せよ。

宮の内。

Q54. 次の傍線部「の」を識別せよ。

鳩の海や月**の**光のうつろへば。

Q55. 次の傍線部「の」を識別せよ。

月の光**の**うつろへば。

Q56. 次の傍線部「の」を識別せよ。

親**の**思ふ子。

Q57. 次の傍線部「の」を識別せよ。

雀の子**の**、ねず鳴きするにをどり来る。(枕草子)

Q58. 次の傍線部「の」を識別せよ。

塵**の**つもりて山となる。

Q59. 次の傍線部「の」を識別せよ。

春日野**の**若菜。

Q60. 次の傍線部「の」を識別せよ。

いと幼き人**の**、文読みたるを呼び寄せて、物問ふ。

Q61. 次の傍線部「の」を識別せよ。

わが矢は外れぬれど、兄**の**は鳥に当たりぬ。

Q62. 次の傍線部「の」を識別せよ。

鏡**の**影。

Q63. 次の傍線部「の」を識別せよ。

昨日の雨よりも、今日**の**こそいみじけれ。

Q64. 次の傍線部「の」を識別せよ。

鶴**の**群れ。

Q65. 次の傍線部「の」を識別せよ。

笛の音**の**、いとをかしげに聞こゆる。

Q66. 次の傍線部「の」を識別せよ。

雪**の**降りたるは。

Q67. 次の傍線部「の」を識別せよ。

唐土（もろこし）**の**人。

Q68. 次の傍線部「の」を識別せよ。

この歌は、人^のをまねびたるなり。

Q69. 次の傍線部「の」を識別せよ。

男^の、女のもとへ行きける夜、雨いたく降りけり。

Q70. 次の傍線部「の」を識別せよ。

いと小さき鳥^の、梢にゐたるを捕らへむとす。

Q71. 次の傍線部「の」を識別せよ。

飛ぶ鳥^の声。

Q72. 次の傍線部「の」を識別せよ。

ほかの花はみな散りぬ。この木^のぞ、なほ咲き残れる。

Q73. 次の傍線部「の」を識別せよ。

心あてに折らばや折らむ初霜^の置きまどはせる白菊^の花。(古今集・凡河内躬恒)

Q74. 次の傍線部「の」を識別せよ。

滝^の音は絶えて久しくなりぬれど。(千載集)

Q75. 次の傍線部「の」を識別せよ。

花の色は移りにけりな。(古今集・小野小町)

Q76. 次の傍線部「の」を識別せよ。

うつくしきもの。瓜にかきたる児の顔。(枕草子)

Q77. 次の傍線部「の」を識別せよ。

えならぬ香のするに、驚きて見出だす。

Q78. 次の傍線部「の」を識別せよ。

黒き雲の、にはかに出で来て。

Q79. 次の傍線部「の」を識別せよ。

衣は、姉のも妹のも、いと清らなり。

Q80. 次の傍線部「の」を識別せよ。

秋風の吹きにし日より。(古今集)

【第4部】入試レベル (Q81～Q100)

難関大の実戦レベル。複数用法の混在・紛らわしい同格／主格・有名出典で総仕上げ。

Q81. 次の傍線部「の」を識別せよ。

時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪の降るらむ。(伊勢物語)

Q82. 次の傍線部「の」を識別せよ。

中將の、いと清げにて。

Q83. 次の傍線部「の」を識別せよ。

しづ心なく花の散るらむ。(古今集・紀友則)

Q84. 次の傍線部「の」を識別せよ。

年ごろ思ひつる人の、かく心変はりせるを聞きて、泣く泣く文を書く。

Q85. 次の傍線部「の」を識別せよ。

大納言殿のまゐり給ひて。

Q86. 次の傍線部「の」を識別せよ。

白き鳥の嘴と脚と赤き、鳴の大きさなる、水の上に遊びつつ魚を食ふ。(伊勢物語・東下り)

Q87. 次の傍線部「の」を識別せよ。

人の待つ里。

Q88. 次の傍線部「の」を識別せよ。

心のうちに思ふ。

Q89. 次の傍線部「の」を識別せよ。

月のいとあかきに。

Q90. 次の傍線部「の」を識別せよ。

人のそしる言の葉。

Q91. 次の傍線部「の」を識別せよ。

いと大きな石の、道をふさぎたるを、人々して取りのけさす。

Q92. 次の傍線部「の」を識別せよ。

鹿の音の聞こゆる。

Q93. 次の傍線部「の」を識別せよ。

あやしう、この翁の歌はこれにはまさりけり。

Q94. 次の傍線部「の」を識別せよ。

いかなれば四条大納言のはめでたく、兼久がはわろかるべきぞ。(宇治拾遺物語)

Q95. 次の傍線部「の」を識別せよ。

をりふしの移り変はるこそ、ものごとにあはれなれ。(徒然草)

Q96. 次の傍線部「の」を識別せよ。

黄なる生絹の単袴、長く着なしたる童の、をかしげなる出で来て、うち招く。(源氏物語)

Q97. 次の傍線部「の」を識別せよ。

あけぼのの空。

Q98. 次の傍線部「の」を識別せよ。

あまたの舟。

Q99. 次の傍線部「の」を識別せよ。

大きやかなる童の、文持ちたるが来て、「これはあるじのなり」と言ふ。

Q100. 次の傍線部「の」を識別せよ。

ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。(方丈記)

採点振り返り

おつかれさまでした。間違えた問題は「置き換えテスト」のどこでつまづいたかを確認しましょう。

- ・ **連体修飾格**…直後が**体言**。迷ったら最後に残るのがこれ。
- ・ **主格**…「が」に置換でき、「の」の前の語が下の用言（述語）の主語になる（風の吹く夜）。
- ・ **同格**…「で」に置換でき、前後が**同じもの**。後ろに同じ体言が省略されている。

- **準体格**…「～のもの・～のこと」と訳し、「の」の下に体言を補える（唐の〔なでしこ〕は）。古文では〈体言＋の〉の形で、すぐ後には・も・を・に・と・なりなどが続く。

主格と同格の最終見分け：後ろの句が連体形で終わり、その下に「の」の前と同じ体言を補えるなら**同格**（白き鳥の、嘴と脚と赤き〔鳥〕）。補えないとき、「の」の前の語を主語とする用言が別の体言を修飾している（風の吹く**夜**）・下に「こと」を補う（雨の降るを見る）・「～ば」「～て」などと先へ続く・文がそこで終わる（ふつうは連体止め）なら**主格**。

繰り返し解いて、「の」を見た瞬間に直後の語をスキャンする習慣をつければ、入試本番でも一瞬で見抜けます。

この問題集は無料です。古文の他の識別（「に」「なり」「が」など）のドリルや、文法解説とあわせてご活用ください。

誰でも古典塾 (<https://kotennosenensei.com>) / 個別指導塾フィット・中本裕太